

“あたりまえ”の風景
生活に寄生する地域活動の場

大田区の地で私は、
12年間の地域活動を行ってきた。
まちを支える底力。
しかし、どれだけの人が
この名脇役たちを知っているのだろう？
裏舞台から生活のすぐ隣へ、
住まう人にどれだけ根付けるか？
地域活動があたりまえに在るまちを目指す。
「知らない」から「あたりまえ」へ。
ここに私たちの居場所をかけたメッセージを建築する。

01. 必要とされる地域力

地方分権による地域活動の社会的地位



地方分権国家となった今日、地域活動が重要視がされる。
大田区では「地域力」と呼ばれ、
今日もまちを支える名脇役である。

02. 浸透しない地域力

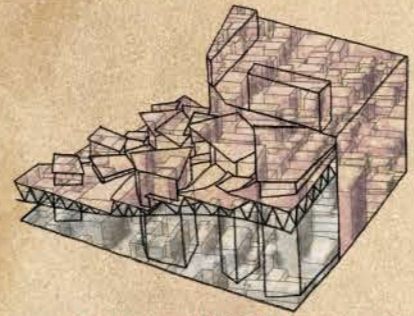
住民の認知度の欠如が引き起こす問題



閉鎖的な活動空間・準備段階での活動場所の不足から
まちの人間に理解が浸透していない。
その認知度の欠如から活動が存続の危機に瀕する。

03. あたりまえに在る地域力

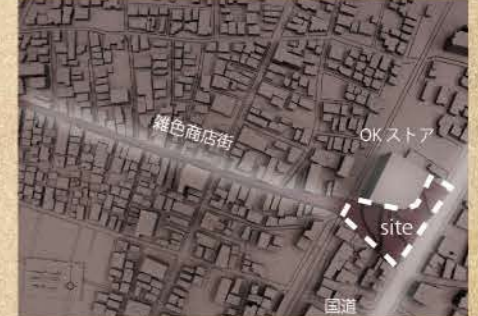
2つの商業空間に寄生する提案



生活のすぐ隣にいつもあたりまえに存在する
地域活動支援施設を設計する。
まちの生活動線として施設を設計する。

04. まちに絡まる地域力

1つの生活動線でまわるまちへ

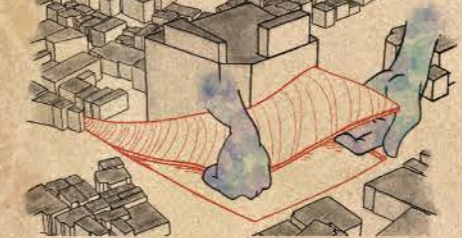


東京都大田区雑色。
わかれてしまっている雑色商店街とOKストアの
2つの生活動線を渡すように、支援施設が1つにつなぎ直す。

05. 寄生する建築の作り方

持ち上げる

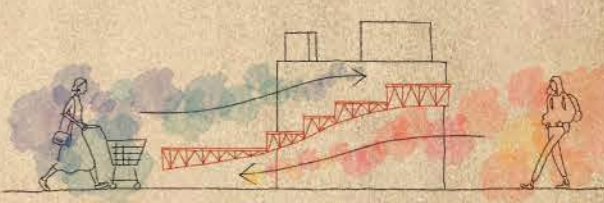
商店街から引き込むスロープ動線



商店街からそのまま引き込まれていくスロープ動線で人の流れを作る。
商店街から続く道をOKストアへ登れるように持ち上げる。
緩やかに空間が変わるようカートを押しながらまわるスロープを採用する。

引き込む

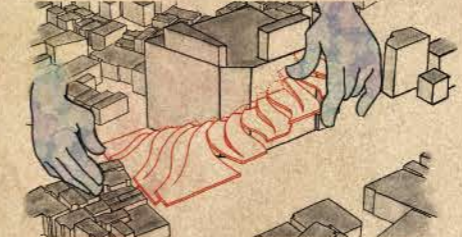
商店街へ収まるまちからの入り口



地盤の上は商店街から施設へ、地盤の下は大きくまちに開いており
そこから逆に一本の商店街に収束していく狭まる入り口になっている。
地域活動を横目に商業空間へと踏み込む。

寄り添う

スーパーへの寄生



持ち上がった地盤は蛇腹状に歩行距離を伸ばし、スーパーのそれぞれの
階へと入り込んでいく。スロープがスーパーに寄り添うことで
商店街とスーパー、そして施設がより混ざり合った空間となる。

変わる

スロープと屋根が作り出す曖昧な屋外空間



スロープと商店の屋根がつくる環境は
スーパーから離れるにつれ、屋内・半屋外・屋外と
緩やかな空間の変化を作り出し境界が曖昧になる。

支える

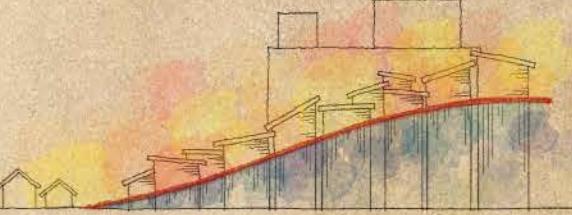
構造体となる緑の下の力持ち



まちを支える支援施設を、持ち上げた地盤を支えるように挿入する。
3000グリットの上に支援施設を立ち上げ地盤を支える。
地域力を可視化するまちの象徴となる。

交わる

新旧のコントラストの創造

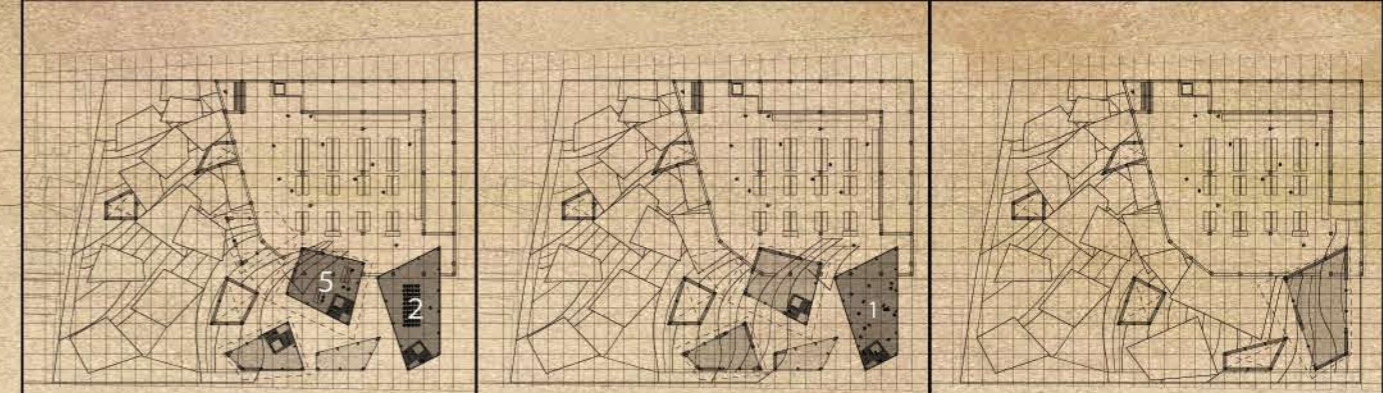
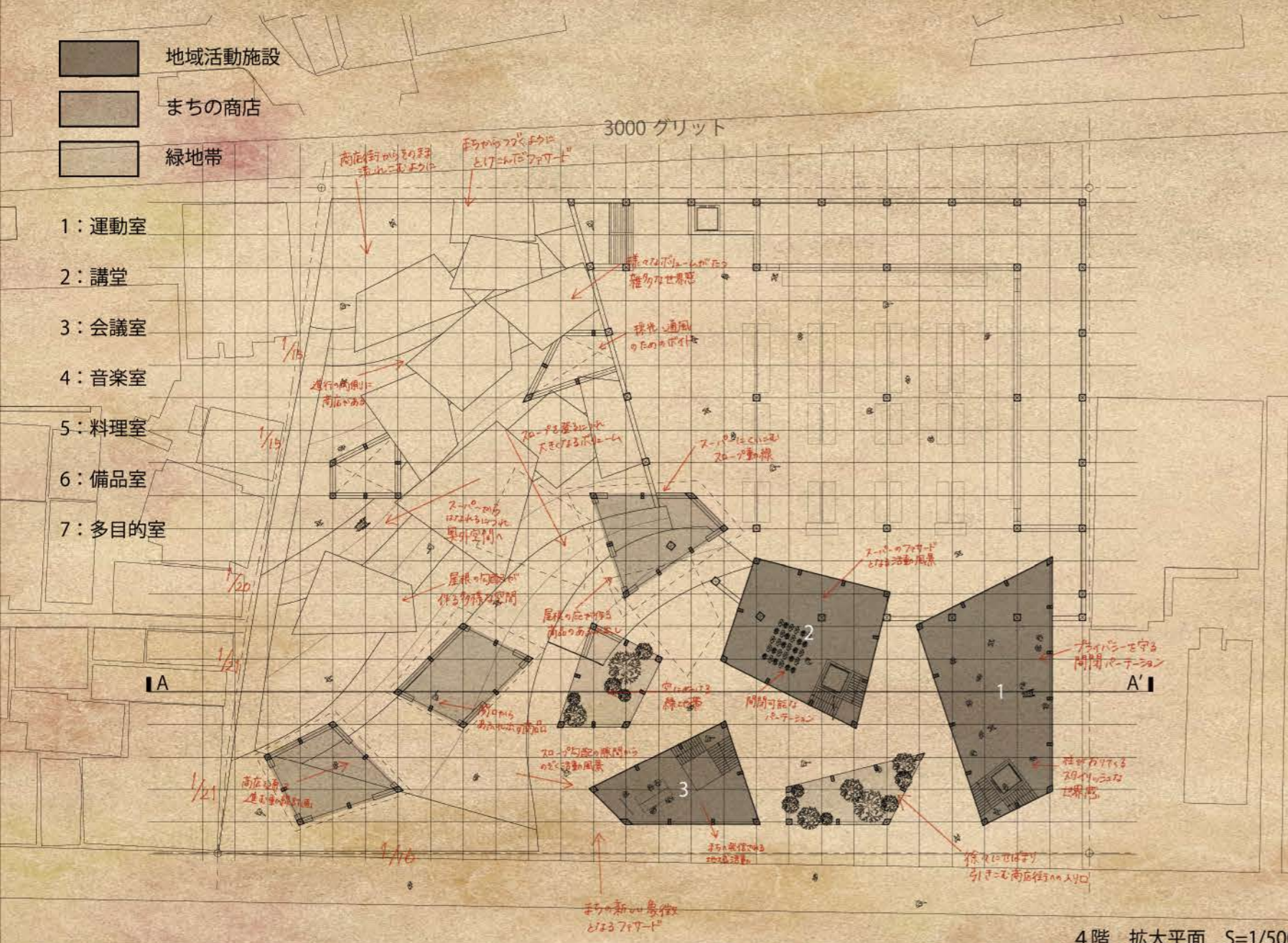


地盤を界にまちの雰囲気そのまま流れ込む上の空間と、
全く新しい支援施設がそびえ立つ下の空間で構成される。
はっきりとした空間変化がまちの人々に明確に地域活動を認識させる。

- 地域活動施設
- まちの商店
- 緑地帯

- 1: 運動室
- 2: 講堂
- 3: 会議室
- 4: 音楽室
- 5: 料理室
- 6: 備品室
- 7: 多目的室

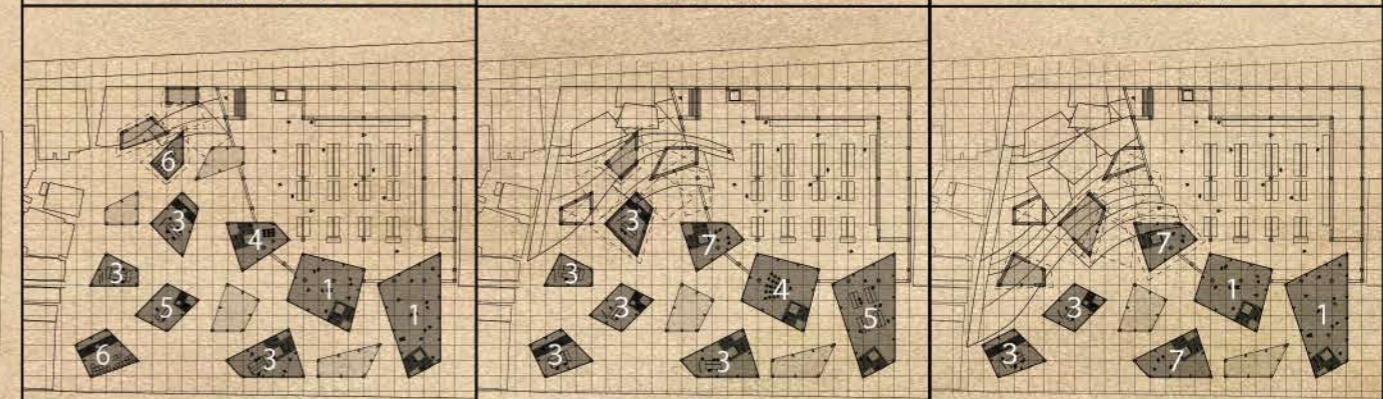
3000 グリッド



5階 平面 S=1/1500

6階 平面 S=1/1500

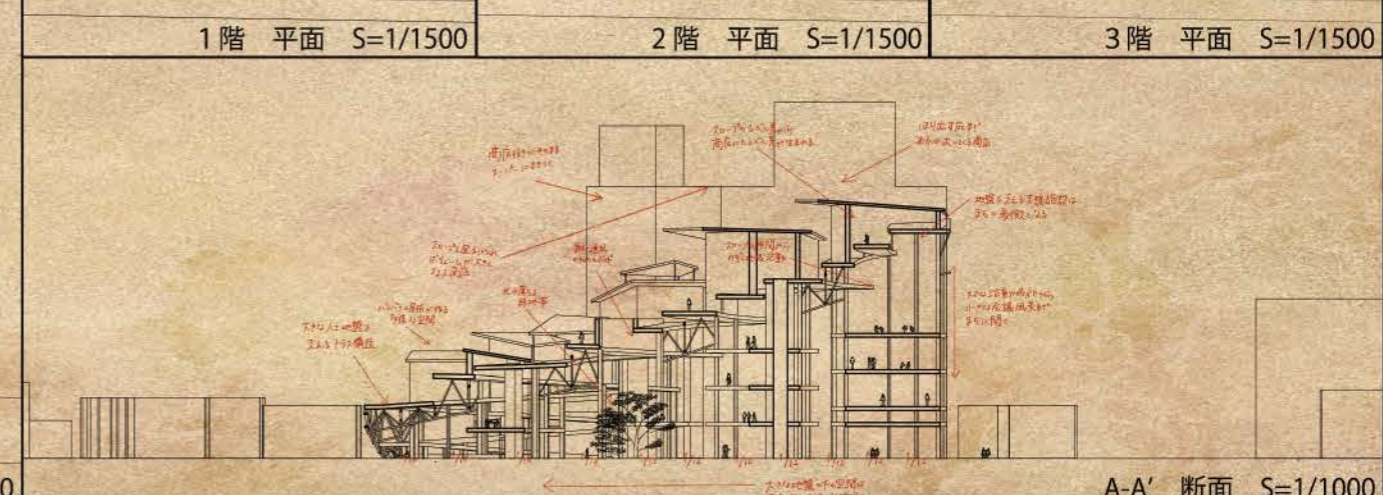
7階 平面 S=1/1500



1階 平面 S=1/1500

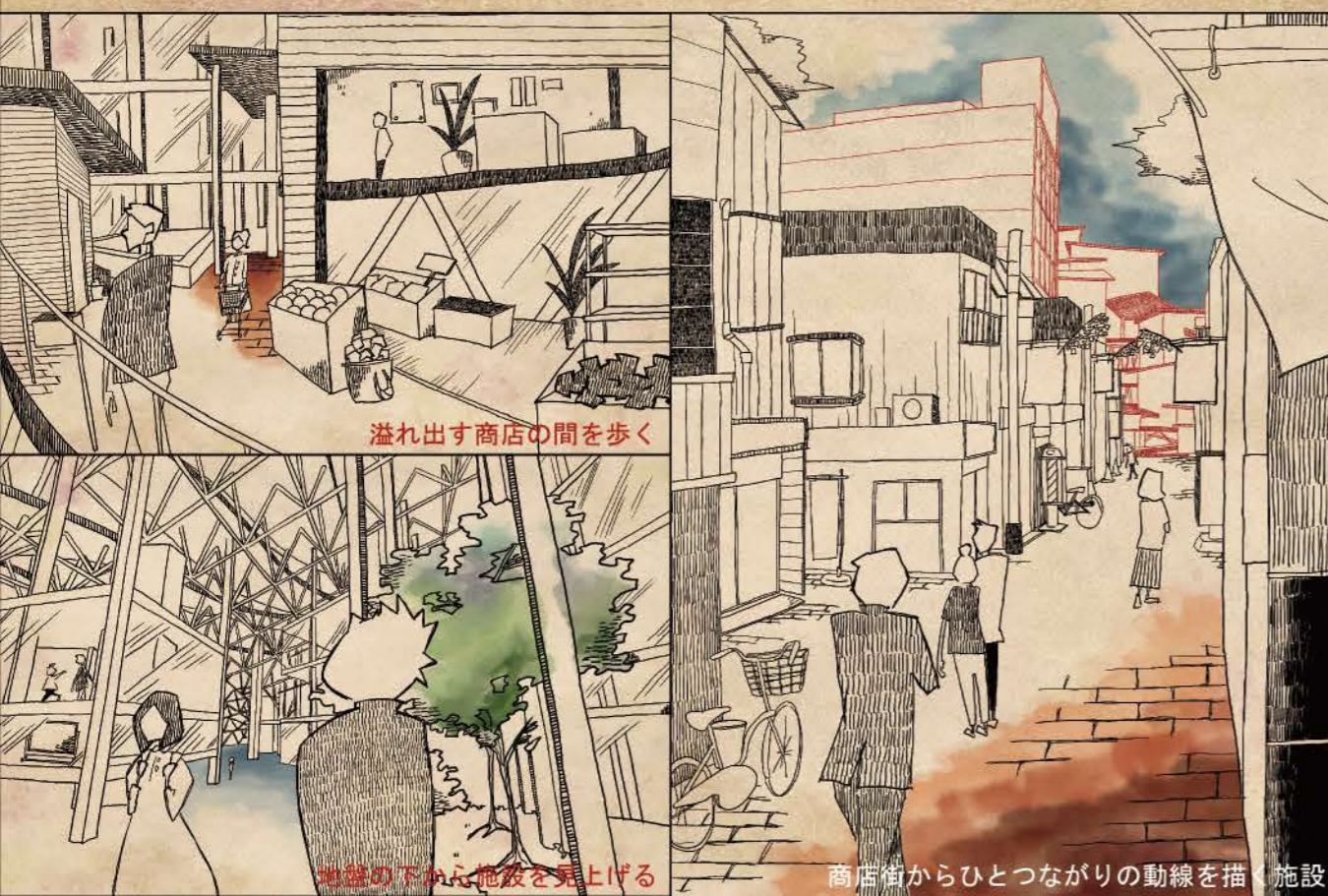
2階 平面 S=1/1500

3階 平面 S=1/1500



4階 拡大平面 S=1/500

A-A' 断面 S=1/1000



溢れ出す商店の間を歩く

地下の下から施設を上げる



商店街からひとつながりの動線を描く



まちから近い距離で地域活動の会議を開く

スロープが生み出す多様な空間で思い思いに動く



まちのファサードとなる地域活動